第５章　青少年の自己評価、自尊感情と逸脱行為、犯罪被害、被害不安

青少年の自尊感情を高めることは、青年期の発達の重要な課題として近年強調されてきている。特に欧米では自尊感情が、非行や犯罪、アルコール中毒や薬物中毒など様々な社会的問題を解決するための特効薬として脚光を浴びている。自分をかけがえのない一人の人間として愛すること、自分を大切に思う感情は、ひいては他者を一人の人間として尊重することにもつながるであろう。しかし自尊感情の高さと逸脱行為の因果関係は明らかではなく、自尊感情を育てることの効用が実証的に確認されているわけではない。日本では、逸脱行為をとる青少年の自尊感情について調べた研究自体、あまり行われていない。

本章では、一人の人間としての自分に向けられた全体的な感情である自尊感情、および自分を評価する際の手がかりになると考えられる様々な個別の領域における自己評価を、逸脱行為をとる青少年とそうでない青少年で比較することによって、逸脱行為の抑制に自尊感情が果たす役割を調べるための足がかりを得ることを目指す。

1　個別領域の自己評価

中学生から大学生に至る青年期において、自分自身を評価するときに重要であろうと考えられる８つの領域について、その領域の被験者自身にとっての重要さと、その領域における自分の評価を尋ねた。評価領域として取り上げたのは「知的能力（頭の良さ）」、「社交性（誰とでも友達になれる；友達の多さ）」、「運動能力」、「容貌」、「優しさ」、「友達からの信頼」（以降、「信頼」と略）、「物事に対するまじめさ」（以降、「まじめさ」と略）、「スタイル」の８つである。領域の重要さを尋ねる質問では、それぞれの領域で肯定的な評価を得ることに対する自分にとっての重要さを質問した。例えば「知的能力（頭の良さ）」では、「知的能力がすぐれている（頭が良い）」という項目に対して、どのくらい重要だと思うかを、「とても重要である」、「かなり重要である」、「やや重要である」、「あまり重要でない」、「全く重要でない」の５件法で回答させた。また個々の領域における自己評価は、「あなたと同じ学年の自分と同じ性別の人」の中での相対的な位置（100 人いるとして自分は何位くらいか）を尋ねた。選択肢は１位から 100 位までを 10 位ずつ 10 の範囲に分けて、そのなかから自分の相対的

な位置を回答させる形式を採用した。集計においては1位から10位の間を「10」、10位から20位の間を「9」とし、90位から100位の間を「1」として得点化した。この結果、得点の高い方が相対的な自己評価が高いということになる。

自己評価を調べる場合、上記のように相対的な自分の位置を評価させる方法ではなく、自己に対する肯定的な記述ないし否定的な記述に対して当てはまるかどうかを尋ねる方法が一般的である。しかし本研究では先行研究（伊藤，1999）に従い、相対的な評価の方を採用することとした。

（1）個別領域の重要性

各領域ごとに、4（学年）×2（性別）×3（行為・体験）の分散分析を行った。被験者の行為・体験には、不良行為、犯罪行為、被害体験、被害不安の程度によって分類された3群の被験者があてられている（第2章参照）。よってこの分析では、同一の被験者のデータについて行為・体験の要因を変えて分散分析を4回行っている。回答の不備のため欠損値として処理されるデータが分析ごとに異なるために、4つの分析で得られた平均値、分散、および有意水準は若干の変動があったが、以下の学年と性別による重要性評定の分析は、学年×性別×不良行為の分散分析の結果を記載する（表1）。また2次以上の交互作用はほとんど認められなかったので、有意な結果のみその都度報告する。

a 学年、性別ごとの重要性評定

すべての領域で学年の主効果が有意であった。多重比較の結果、学年によって領域の重要性が異なることが明らかになった。全体として大学生において各領域の重要性評定が低く、中学1年生で高かった。学年が上がるに従って価値観が多様になるために、全体としての領域の重要性評定が低くなると考えられる（第4章参照）。そのなかで「容貌」、「スタイル」では高校2年生が他の学年と比べて重要性を高く回答していた（図1）。

一方、性別の主効果は4つの領域に認められた。男性は「運動能力」、「知的能力」を女性より重要視するのに対して、女性は「優しさ」、「信頼」を男性より重要視していた。男性が能力的な側面を重視し、女性が性格的な側面、なかでも他者に対する優

しさや友人からの信頼といった他者との関係性に関わる側面を重要視するという傾向は、従来の性役割観や先行研究（伊藤(1993)など）とも一致するが、本研究はこのような性差が中学１年生ですでに確立していることを示している。

表1　個別領域の重要性

		知的能力	社交性	運動能力	容貌	優しさ	信頼	まじめさ	スタイル
中学1年生		3.80 a	4.43 a	3.74 a	3.28ab	4.44 a	4.61 a	4.15ab	3.13ab
中学3年生		3.45ab	4.46 a	3.57 a	3.19ab	4.49 a	4.58ab	4.30 a	3.00 b
高校2年生		3.31 b	4.32 a	3.66 a	3.49 a	4.43 a	4.58ab	4.04ab	3.37 a
大学1年生		3.50ab	3.97 b	3.25 b	3.15 b	4.19 b	4.40 b	4.00 b	2.93 b
	F値	6.50＊＊	16.57＊＊	14.37＊＊	6.19＊＊	6.73＊＊	5.07＊	4.37＊	8.86＊＊
男性		3.60	4.20	3.64	3.27	4.25	4.45	4.08	3.08
女性		3.33	4.26	3.37	3.32	4.46	4.60	4.07	3.17
	F値	10.05＊	0.31	19.68＊＊	0.07	13.11＊＊	9.91＊	0.00	0.44
不良行為	少	3.55	4.10 b	3.42	3.02 c	4.25	4.40 b	4.20 a	2.89 b
	中	3.42	4.24ab	3.51	3.25 b	4.36	4.54ab	4.09ab	3.10 b
	多	3.46	4.34 a	3.60	3.60 a	4.44	4.60 a	3.94 b	3.38 a
	F値	2.23	4.70＊	2.63	20.81＊＊	3.34	5.58＊	6.52＊	14.05＊＊
犯罪行為	無	3.50	4.20	3.46	3.21 b	4.35	4.51	4.14 a	3.04 b
	少	3.39	4.25	3.60	3.47 a	4.34	4.52	3.89 b	3.32 a
	多	3.42	4.45	3.91	3.68 a	4.49	4.60	3.89 b	3.42ab
	F値	1.56	0.84	2.42	5.89＊	0.53	0.31	7.53＊＊	4.82＊
被害体験	無	3.48	4.19	3.48	3.24 b	4.33	4.50	4.10	3.06
	少	3.34	4.29	3.55	3.20 b	4.32	4.54	3.99	3.11
	多	3.63	4.38	3.66	3.71 a	4.58	4.64	4.08	3.47
	F値	2.80	0.48	1.88	6.58＊	2.65	0.49	1.30	3.04
被害不安	低	3.39	4.21	3.41	3.25	4.30	4.49	4.03	3.10ab
	中	3.50	4.16	3.50	3.20	4.30	4.49	4.06	2.99 b
	高	3.52	4.33	3.62	3.41	4.46	4.59	4.15	3.27 a
	F値	1.03	3.04	2.75	3.01	3.62	1.80	1.36	4.77＊

注1）＊＊……0.1%水準で有意　＊……1%水準で有意
注2）異なる小文字の数値どうしはscheffeの多重比較の結果、5%水準で有意差が認められた

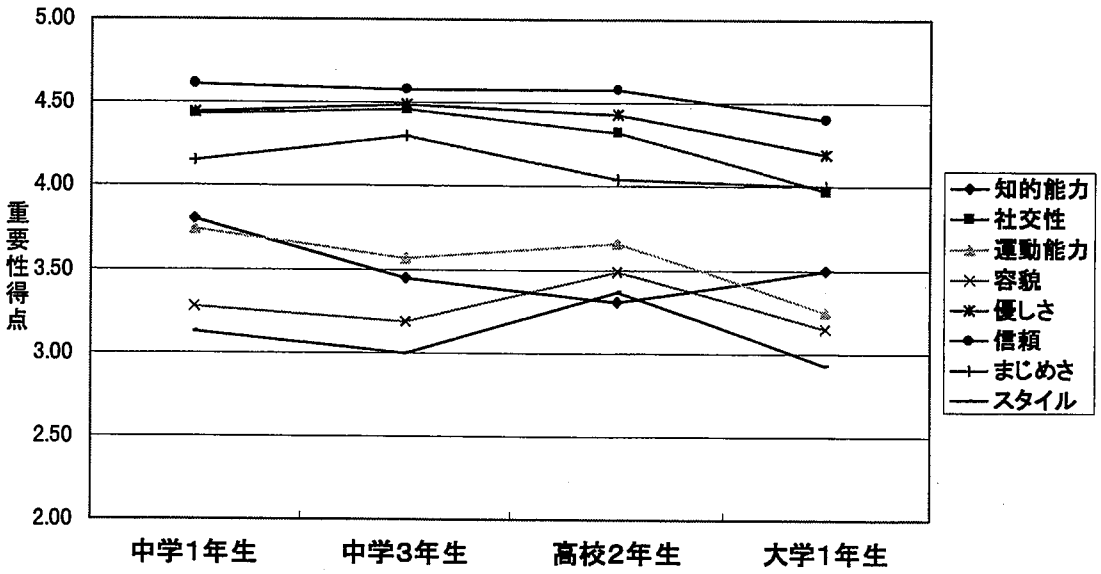

図1　個別領域の重要性

また「スタイル」において学年と性別の交互作用が有意であり（F(3,902)=3.84,p<.01)、高校２年生の女性において重要度が高く評定されていた（図２)。「容貌」においても有意には至らなかったが同様の傾向が認められている（F(3,900)=3.22,p<.05)。青年期中期の女性において外見的な側面の重要性が強く意識されていることがうかがわれる。

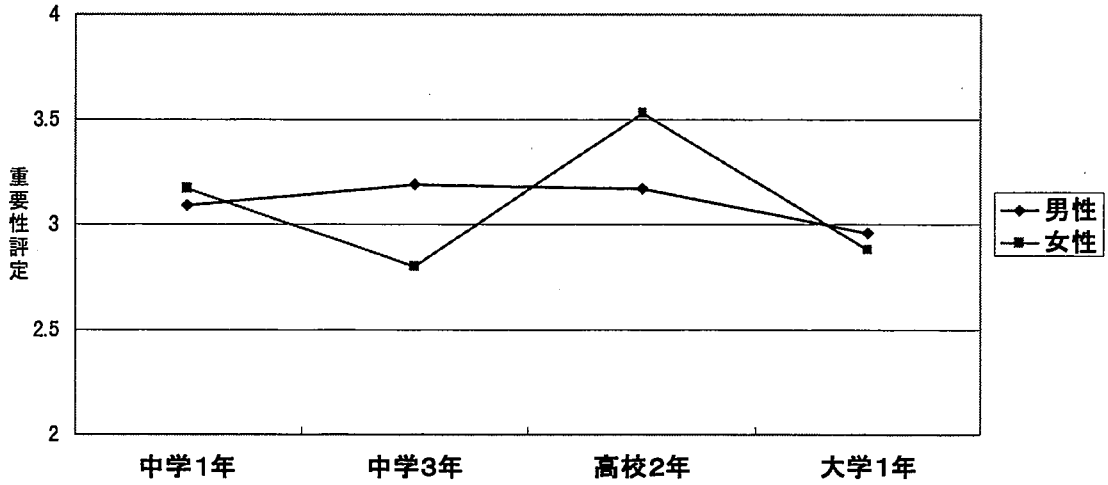

図2「スタイル」の重要性

領域間で評定値を単純に比較すると「信頼」、「優しさ」の重要性が高く、「社交性」、「まじめさ」がそれに続いている。「容貌」と「スタイル」の２つの領域の重要性は低かった。「優しさ」や「まじめさ」といった性格的な側面の重要性を高く評価する傾向は伊藤(1999)でも得られおり、今回はそれを確認する結果となった。

b行為・体験による重要性評定

不良行為の主効果は、「容貌」、「スタイル」、「社交性」、「信頼」、「まじめさ」で認められた。不良行為の経験が多い被験者ほど、「容貌」、「スタイル」といった外見や「社交性」や「信頼」といった友人関係に関する領域の重要性を高く評定し、「まじめさ」の重要性を低く評定していた（図３)。同様の傾向は犯罪行為の経験においても認められ、犯罪行為の経験がある被験者は「容貌」、「スタイル」の重要性を高く評定し、「まじめさ」の重要性を低く評定していた。ただし友人関係に関する領域では差異は認められなかった。

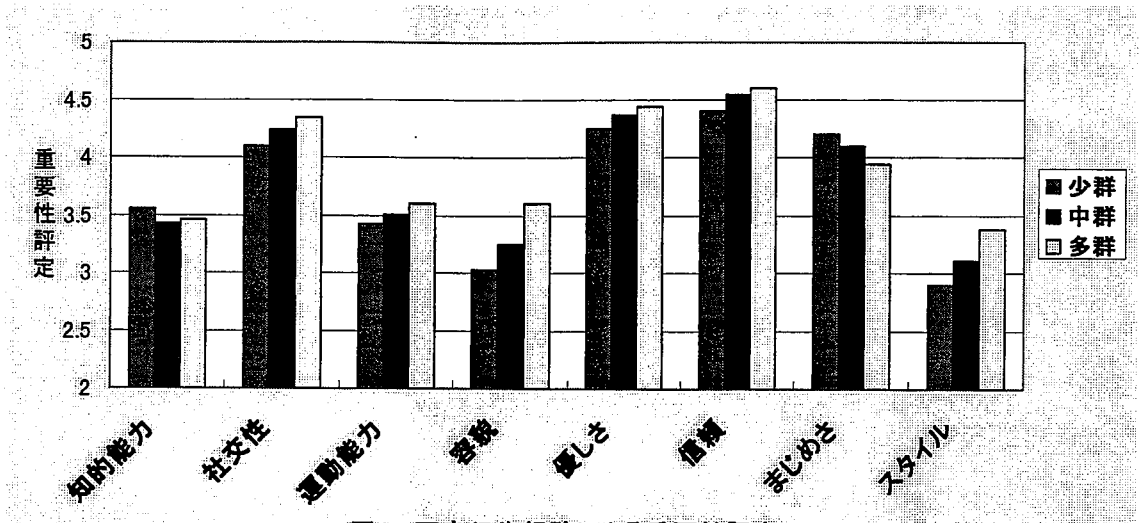

図3　不良行為経験による重要性評定

被害体験の主効果は「容貌」のみに認められ、被害体験の多い被験者は「容貌」の重要性を高く評定していた。また被害不安の主効果は「スタイル」のみに認められ、被害不安の高い被験者は「スタイル」の重要性を高く評定していた。

また、「まじめさ」において学年と被害体験の交互作用が有意であり（$F(6,908)=3.33, p<.01$）、中学１年生の被害体験の多い被験者で「まじめさ」の重要性が高く（$M=4.64$）、中学３年生の被害体験の多い被験者で重要性が低かった（$M=3.59$）。

（２）個別領域における自己評価

領域の重要性と同様の分散分析を行った。学年と性別による自己評価の結果は、学年×性別×不良行為の分散分析の結果を記載する（表２）。

ａ学年、性別ごとの自己評価

学年の主効果は、「知的能力」、「社交性」、「まじめさ」において認められた。多重比較の結果、大学１年生が他の学年と比較して「知的能力」と「まじめさ」の相対的な自己評価が高く、「社交性」の自己評価が低かった。しかし他の領域では学年による変化は認められなかった（図４）。児童期から青年期にかけて発達的に他者との客観的な比較を可能とする認知的能力を獲得するにつれて自己評価が次第に低くなる。しかし本研究では上記の３つを除くと学年による差異は認められず、すでに中学に入

る頃までにそのような能力を獲得していると考えられる。

表2 個別領域の自己評価

		知的能力	社交性	運動能力	容貌	優しさ	信頼	まじめさ	スタイル
中学1年生		5.27 b	6.41 a	5.63	4.57	6.39	5.87	6.11 b	4.59
中学3年生		5.11 b	6.23 a	5.52	4.44	6.33	5.86	6.14 b	4.36
高校2年生		5.30 b	5.81 a	5.52	4.44	6.42	5.96	6.22 b	4.26
大学1年生		6.21 a	4.96 b	5.39	4.93	6.50	6.12	6.84 a	4.51
	F値	9.35＊＊	16.59＊＊	1.09	1.97	0.22	0.53	5.14＊	0.32
男性		5.89	5.61	6.00	4.96	6.86	6.10	6.60	4.90
女性		5.27	5.71	4.92	4.28	5.96	5.87	6.22	3.89
	F値	10.85＊＊	0.02	42.74＊＊	16.59＊＊	33.99＊＊	1.67	3.47	40.16＊＊
不良行為	少	5.92 a	4.86 c	4.98 b	4.23 b	6.23	5.82	7.00 a	4.17
	中	5.76 a	5.78 b	5.60 a	4.77 a	6.51	6.15	6.62 a	4.58
	多	5.08 b	6.30 a	5.86 a	4.88 a	6.53	5.97	5.60 b	4.47
	F値	10.32＊＊	24.18＊＊	8.90＊＊	6.30＊	1.28	1.69	25.37＊＊	1.91
犯罪行為	無	5.71 a	5.57	5.35	4.63	6.46	6.04	6.66 a	4.30
	少	5.45 a	5.89	5.81	4.67	6.42	6.01	5.90 b	4.76
	多	4.48 b	6.17	6.44	4.71	6.12	5.37	4.88 c	4.79
	F値	5.78＊	0.71	3.02	0.05	1.67	2.25	17.00＊＊	1.36
被害体験	無	5.73	5.51	5.47	4.62	6.43	5.99	6.54	4.42
	少	5.44	5.85	5.55	4.65	6.53	6.03	6.36	4.25
	多	5.02	6.33	5.59	4.89	6.48	5.91	5.85	4.72
	F値	1.05	2.21	1.46	3.35	1.98	0.14	1.57	3.94
被害不安	低	5.57	5.84	5.70	4.87	6.56	6.23	6.57	4.49
	中	5.68	5.58	5.22	4.44	6.25	5.90	6.33	4.46
	高	5.52	5.59	5.61	4.61	6.51	5.86	6.40	4.25
	F値	0.33	1.13	3.86	3.01	1.93	2.44	0.84	1.23

注1)＊＊……0.1%水準で有意　＊……1%水準で有意
注2)異なる小文字の数値どうしはscheffeの多重比較の結果、5%水準で有意差が認められた

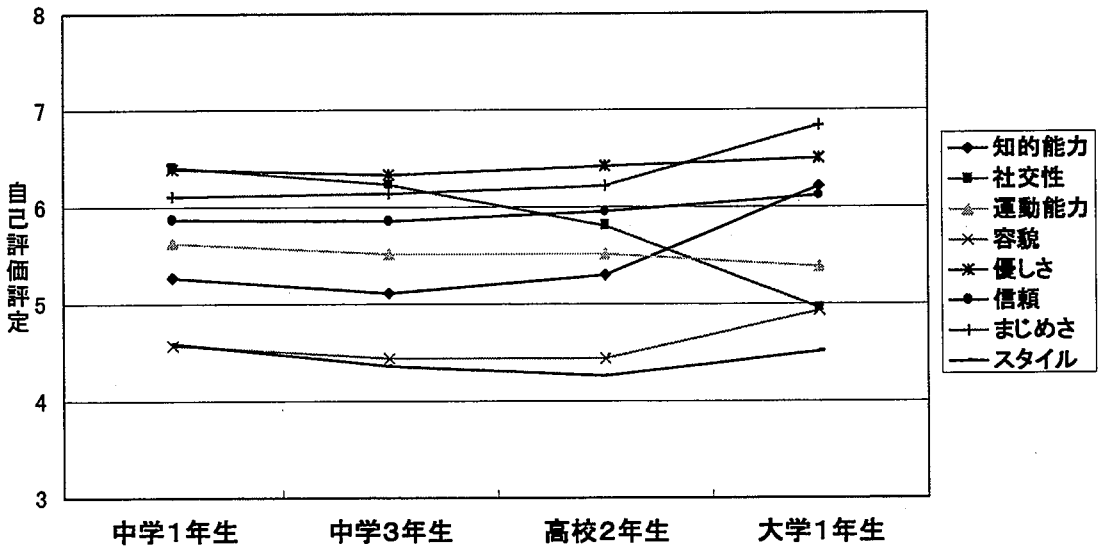

図4 個別領域の自己評価

性別の主効果は、「知的能力」、「運動能力」、「容貌」、「優しさ」、「スタイル」の5

つの領域で認められた。いずれも男性が女性よりも高い自己評価を保持していた。今回の質問は自分と同じ性別の他者と比較する相対的評価を尋ねていることを考えると、この結果は、男性の方が他者と比較した自分を肯定的にとらえていることを示している。特に女性が重要視していた「優しさ」においても、男性の評価の方が肯定的であった。

大学生において「知的能力」の自己評価が高いという結果の理由の１つは、被験者のサンプルの問題である。調査対象となった大学の学力偏差値が「知的能力」の自己評価に影響を与えている可能性がある。今回の調査では東北地方の国立大学２校（136名）と都内の私立大学１校（205 名）の計３校で調査を行ったが、国立大学と私立大学に分けて個別領域の自己評価の比較を行ったところ、「知的能力」と「運動能力」で有意であった。国立大学の被験者の方が「知的能力」の自己評価が高く（$F(1,334)=24.45, p<.001$；M=6.90 vs M=5.78）、その評定値は他の学年の平均値と比較してもかなり高い。大学生という被験者のサンプル自体、学力において選抜された集団である。このような理由から、「知的能力」の自己評価は大学１年生で上昇したと考えられる。一方「運動能力」では、国立大学の被験者の方が自己評価が低く（$F(1,334)=7.03, P<.01$；M＝ 4.93　vs　M=5.68）。その評定値は他の学年の平均値と比較しても低い。この結果は学力偏差値の結果に対応しており、偏差値の高い大学の学生の方が「運動能力」の自己評価が低いことを反映していると考えられる。ただし「まじめさ」では有意ではなかった（$F(1,333)=3.80$, n.s.）。

「社交性」の自己評価は、中学１年生以降で次第に低下していき、大学１年生で最も低くなる。質問紙では「社交性」という言葉の多様な意味を考慮して、「誰とでも友達になれる」、「友達の多さ」という注を付与した。このため、被験者が「社交性」を友人の数の多さという観点から評価したかもしれない。一般に孤独感は青年期を進むに従って次第に高まっていき（落合，1989）、しかも男性の方が女性よりも高いことが報告されている（諸井,1985）。「社交性」には性差が認められなかったものの、８つの領域の中で唯一女性の平均値が男性を上回っており、孤独感研究の結果と合致している。「社交性」の自己評価が学年とともに低下していく今回の結果は、青年期を進むにつれて友人関係に様々な問題を抱えていくことを反映した結果と言えるかもしれない。

b行為・体験による自己評価

不良行為の主効果は、「知的能力」、「社交性」、「運動能力」、「まじめさ」、「容貌」の５つの領域で認められた。不良行為の経験の多い被験者ほど、「まじめさ」、「知的能力」の自己評価が低く、「社交性」、「運動能力」、「容貌」の自己評価は高かった（図５）。不良行為の経験の多い被験者が自分をまじめではないと評価し、「知的能力」が低く「運動能力」が高いと自己認知している結果は、現実をある程度反映しているかもしれない。一方、容貌の優れている青少年の方が不良行為に走りやすいということは考えづらい。この傾向は、外見を重視する自分と同じような価値観を持つ仲間のなかで、自己高揚的に自己認知をしているもかもしれない。また「社交性」は不良行為の経験の多い被験者にとって重要な側面と認識されていたため、これも自己高揚的認知と解釈することもできる。しかし今回不良行為の指標として用いられた項目のなかには、友達と一緒に行うような行動（ゲームセンターや飲酒、タバコ）が含まれていたことも影響を与えているかもしれない。

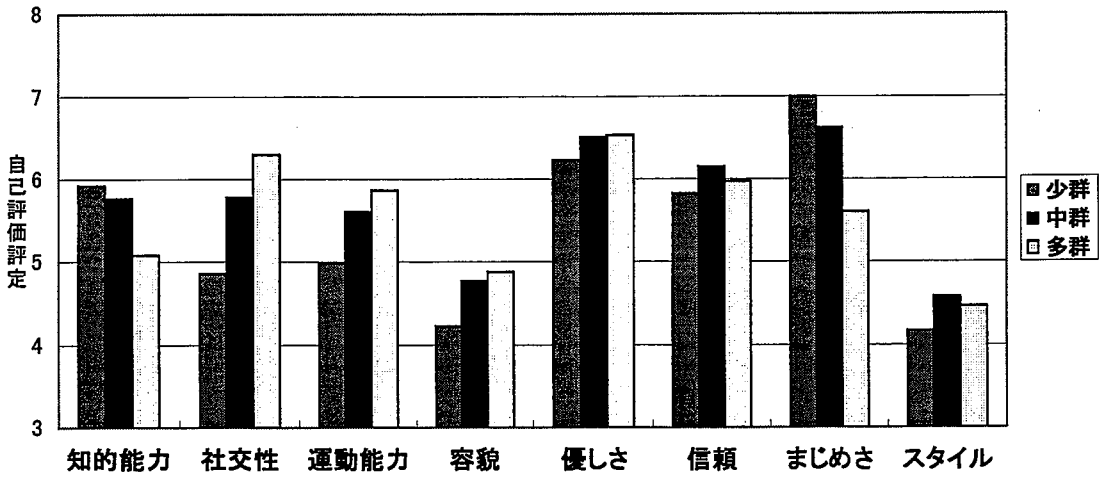

図5 不良行為経験による自己評価

「まじめさ」の主効果は性別×不良行為の交互作用によって特徴づけられ（$F(2,884)=4.65, p<.01$）、不良行為の経験の多い女性の自己評価が特に低かった（図６）。

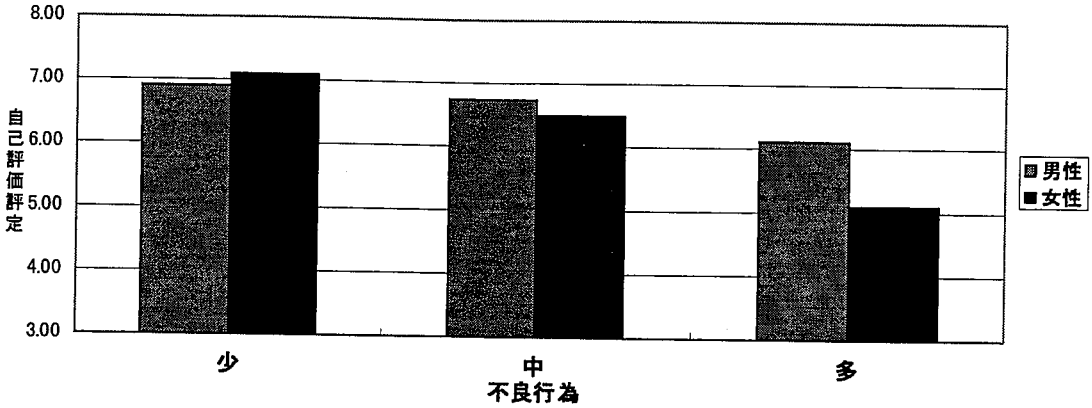

図6 「まじめさ」における性と不良行為の交互作用

犯罪行為の主効果は、「まじめさ」、「知的能力」において認められ、犯罪行為の経験の多い被験者ほど自己評価が低く、不良行為の結果と一致している。「知的能力」の主効果は、学年×犯罪行為の交互作用によって特徴づけられ($F(6,899)=3.96, p<.001$)、大学1年生においてのみ、犯罪行為の経験の多い被験者（M=8.38）が犯罪行為の経験の無いないし少ない被験者（M=6.20；M=6.02）よりも自己評価が高かった。さらに「運動能力」は有意に至らなかったが、不良行為と同様に、犯罪行為の経験の多い被験者ほど自己評価が高い傾向が認められた（$F(2,899)=3.02, p<.05$）。被害体験と被害不安の主効果は認められなかった。

c 個別領域の自己評価の全体的傾向

統計的検定は行っていないが、全体として「容貌」、「スタイル」の相対的な自己評価は低かった。本測度では 10 件法を採用しており、理論上の中央値は 5.5 となる。上記の2つの領域の平均値は、学年、性別、被験者の行為・体験の差異を越えて一貫して5を下回っていた。特に女性においては、この2領域の自己評価は他と比較して著しく低いことが明らかにされた。一方、「優しさ」、「まじめさ」といった性格特性における相対的自己評価は、他の領域の自己評価と比較して高い。特に「優しさ」の平均はほとんど6を上回っていた。これらの結果は伊藤(1999)と一致している。「容貌」や「スタイル」は、他の領域と比較して客観的な評価が可能であったり、評価基準が社会的に比較的共通しているため、自己高揚的な認知が生じにくい。しかし平均

準が社会的に比較的共通しているため、自己高揚的な認知が生じにくい。しかし平均は理論的中央値 5.5 を下回っていることから、現実の正確な認知を反映しているというよりも、自己卑下的な認知傾向を示した結果と言える。一方、「優しさ」や「まじめさ」といった性格特性は、その評価基準が曖昧であり主観的であることからも自己高揚的な認知を生じさせることが可能であるために、今回のような結果が得られたのかもしれない。

2．自尊感情

自尊感情を測定する尺度としては Rosenberg(1965)の自尊心尺度が一般に用いられる。この尺度は自分に対して「非常によい」とする評価と「これでよい」とする評価のうち、後者の自己受容的な評価を測定するものとされているが、項目自体は自分が肯定的な特性を持っているかどうかを尋ねることに限定されている。本研究では広い意味での自尊感情を調べることを目指して、自分自身に対する全体的な態度や評価を尋ねる 19 項目からなる尺度を構成した。

まず Rosenberg(1965)の自尊心尺度から中学生が回答することを考慮して適切だと考えられる６項目（項目番号１～６）を採択した。さらに「今の自分は本当の自分ではないような気がする」といった現実の自分に対する希薄な感覚を尋ねた３項目（項目番号 17 ～ 19）と、「自分のことが好きである」、「自分はかけがえのない人間だと思う」というより広い意味での自分を尊重する感情、評価を尋ねた２項目（項目番号７～８）を加えた。また青年期において、自分が思っている自分の姿と重要な他者が見ていると想像する自分の姿が異なっている場合には不適応感を生じさせると予想される。そこで他者から見た自分の姿が本来の自分とは違うと感じるずれの認識を調べるために、両親から見た自分と本当の自分とのずれについて尋ねる４項目（項目番号９～ 12）と、クラスの友人から見た自分と本当の自分のずれについて尋ねる４項目（項目番号 13 ～ 16）を作成した。これらの項目の内容は、「他者（両親ないし友人）といるときの自分は本当の自分ではないような気がする」、あるいは「他者（両親ないし友人）は本当の私の姿をわかっている」といった内容からなる。

（１）尺度の因子分析と下位尺度間の相関